

館林キリスト教会

デボーションノート（2010年）

3月1日 今日の通読箇所 詩篇 第136篇1～10

「感謝の詩篇」

礼拝において祭司が「なになにをなしたまいし神に感謝せよ」と唱え、会衆が「主の憐れみは永久に絶えない」と唱和する。典型的な礼拝のための詩篇だ。「イスラエルの賛美の中に住みたもう者よ、汝は聖し」という言葉もあり、反対に「つぶやきは実行的無神論だ」とも言う。閉じ込められた牢獄も賛美の間に破れ、奇跡的に救いだされたパウロのケースもある。どうか常に賛美の中に主の臨在を拝したいものだ。

3月2日 今日の通読箇所 詩篇 第137篇1～9

「主の選民」

度々の背反のため神に裁かれたイスラエル人は、戦争に破れバビロンに捕囚となり、思いもかけず亡国の憂き目を見ることになった。異邦人の侮蔑にかこまれながら故郷を思って泣く彼らの歌は、いまでも我々の同情をそそる。しかし彼らがバビロンで真実に悔い改めた時、神は彼らを捕囚の縄目から解放して本国帰還を許し、再びイスラエル建国の機会が与えられたのだった。本当に旧約聖書は人間の繰返しの背反と、神の寛容と許しの記録だといえるのだ。

3月3日 今日の通読箇所 詩篇 第138篇1～8

「謙遜」

「主は高くいらせられるが低い者を顧みられる」とは繰返し示される真理だ。見るからに豪然と構える人もいる。人前には謙遜を装いつつ内心人を軽蔑し、ひそかに自ら高ぶる者もいる。しかし神は「高ぶるものを遠くから知られる」のだ。アウグスチヌスは「クリスチャンの基本的な人格は第一に謙遜だ。第二も、また第三も謙遜だ」といった由。

3月4日 今日の通読箇所 詩篇 第139篇1～24

「神の偏在」

神様について勉強するのに、大切な一つの基礎的な真理が記されている、有名な詩篇だ。その真理とは「神の偏在」だ。[1-7節]には「偏在の神は我々のすべてを知り給う」という真理が、[8～12節]には「神の臨在は我々の救いだ」とい

う真理が、また[13~18 節]には「造り主として、我々自身とその生涯の全てを知り給う神」という真理が記してある。そして結論は[23,24 節]。偏在の神の前に「我が心と、思いが清く、またわが行く道の正しからんことを」との祈りだ。

3月5日 今日に通読箇所 詩篇 第140篇1~13

「感謝の詩篇」

セネカは「愛するルシラスよ。我にとりて生きることは戦いなり」といった。実業、政治、会社、学校などに限らず、すべてこの世界は食うか食われるかの戦場だ。近所の奥さんの蔭口でも場合によっては中々深刻だ。この詩篇は世の中の、つらい被害者の立場で読まないピンとこない。我々でもこういうやりきれない被害者の祈りを神に献げる場面もあろう。神はその時こんな人間的な弱さにまみれた不完全な祈りも、憐れみによって整え聞きいれ給うのだ。

3月6日 今日に通読箇所 詩篇 第141篇1~10

「唇の門番」

昔から「口は禍の門」などという。また「言葉に失敗のない人はほとんど完全な人格者だ」などとも言われる。実際、墮落してしまった人間には言葉の管理は難しく、つい失敗が多いものだ。しかも我々の正しい言葉が時には人を生かす光となり、反対に悪い言葉は人を殺す剣にもなる。それゆえ「私の口に門番を置いて、唇の戸を守って下さい」とは本当に良い祈りだと思う。

3月7日 今日に通読箇所 詩篇 第142篇1~7

「マスキールの歌」

「マスキール」は「理解」また「教への歌」の意味だそうだ。ダビデは理由なくサウル王に追われて逃げ回り、しばしば命さえも危険だった。いま止むなくアドラムの洞窟に身を隠したその有様は、さながら袋の鼠、風前の灯だった。しかしダビデには信仰、祈り、賛美があり、神によって何度も危機から助け出されて、ついにイスラエルの王となるに至ったのだった。この神の摂理の体験と理解こそ、彼の教への根拠だった。

3月8日 今日に通読箇所 詩篇 第143篇1~8

「落ち込む日々」

困難と迫害のために落ち込んだ詩人は「私はいにしえの日を思い出し、あなたが行われたすべてのことを考え、あなたのみ手の業を思います」と言っている。誰でも過去に困難や危険の経験は多く、またその時々神の救いと助けも記憶している。聖書にも実例が溢れている。思い乱れて心が限りもなく落ち込む時

に、それらを思い起こすのは信仰回復の道である。経験してきた多くの神の恵みを思い返し、信仰により、自分の「気を取りなおす」のは幸いだ。

3月9日 今日に通読箇所 詩篇 第144篇1～11

「神の御威光」

私は若い時大きな罪を犯し、許されたことは信じたものの、その後同じ誘惑に勝てるかどうか、確信がなく勝利がなくて苦しんでいた。その時、ふと、この詩篇を読んだ。弱い、敗北感に捕えられた一人のクリスチャンを助けるために、神様が本格的に乗り出して下さるのだ。私はその時感極まって「神様、私は小さな者で、私の戦いも小事です。あなたがそんなに、本気で全力で乗り出して下さるなんて」と祈った。その時、確信と勝利が与えられたのだ。

3月10日 今日に通読箇所 詩篇 第145篇1～12

「賛美の詩篇」

詩篇も最後の数篇になるとほとんど賛美の詩が連ねてある。感謝、賛美は主のみこころであり、また我々の霊的な力の根源である。賛美の中にエリコの城壁は崩れて勝利となり、ピリピの牢獄も破壊してパウロ、シラスは救い出された。「主を喜ぶことはあなた方の力である」これに反して「つぶやきは実行的無神論だ」などといわれるのだ。実にこの詩篇の3節にいうように「主は大いなる神で、大いに誉め称えらるべきです」われらの心も賛美で溢れよ。

3月11日 今日に通読箇所 詩篇 第146篇1～10

「人間の無力」

「もろもろの君に、人の子に信頼してはならない」とある。君達とは王侯貴族、富豪、有力者。人の子は一般人間のことだろう。彼らの知偶、庇護、後援はいかにも心強いが、しかし彼らもやがて死ぬ。死なないまでも有為転変、いつ急に失脚し落ちぶれ、当てにならなくなるか分からないのは、歴史の中に、また目前の政治世界などに明白だ。

3月12日 今日に通読箇所 詩篇 第147篇1～20

「天地の詩篇」

ここに歌われているのは自然界の詩である。神は天を星で飾り、大空の雲の中から四季折々に、雨、雪、氷、を降らせる。春風が吹けば、野辺には水が流れ草が生え、畑には麦も熟す。猛獣も、人も、小がらすも神の養いによって満ち足りる。しかも天地を支配なさる神は優しく「心の打ち砕かれたものを癒し、その傷を包まれる」のである。われらもダビデのように神を崇めよう。

3月13日 今日の通読箇所 詩篇 第148篇1～14

「全宇宙の賛美」

あるギリシャの哲学者は「全宇宙は調和しているから、哲学者には宇宙の妙なるハーモニーが聞こえる」と言った。しかしこの詩篇の作者の耳には、全宇宙に響き渡る賛美の音が聞こえるのだ。天使も万軍も、天体も、鳥も動物も植物も、雪も露も雨も、王侯庶民、老若男女、言葉を極めて神を賛美するとは、何とすばらしい宇宙の歌、音楽だろう。しかしそれは、主の再臨の後の宇宙だ。

3月14日 今日の通読箇所 詩篇 第149篇1～9

「正義感」

[6節]の「そののどには賛美、その手には剣」というのは厳しい表現だ。しかしやがて主の再臨、神の国の出現のとき、主の民が立てられて主と共にその裁きを執行することは、聖書に記された予言である。多くの弱い者を虐げ殺し、権勢と栄華に誇った圧政者、理由なしに多くのクリスチャンの血を流した迫害者が、やがてその刈り入れの時を迎えるのは当然だ。これはある意味でクリスチャンの正義感の詩篇なのだ。

3月15日 今日の通読箇所 詩篇 第150篇1～6

「昭和48年11月」

交読を「創世記一章」から始めたのが昭和48年11月。解説「今日の交読文」を載せ始めたのが51年3月だ。60年4月から続いた詩篇の交読は今日終る。私も会衆も聖書の順序に従って毎週一章ずつ、大意は勉強しているわけだ。ところがマラキ書まで301章あってあと5年半かかる。でもまあ私の死ぬ前には解説と共に旧約は終わりそうだ。新約はどこまで行けるだろうか。

3月16日 今日の通読箇所 ハバクク書1：1～11

「バビロン軍」

[1～4節]は、ハバククの祈りである。彼は、正義が行われず、悪と暴虐がはびこるイスラエルの現状を悲しみ、その回復を祈るのだ。しかしこれに対する神の答えは恐るべきもので、イスラエルを裁き、反省させるために、当時の強大国バビロンの侵入を許すというものだった。これは信じられない宣告だった。文字どおりの荒療治だ。そのあと、バビロンの強力な軍事力、征服力の描写がある。(最後にイスラエルはバビロンに滅ぼされた)。しかしこれによってイスラエルは反省し悔い改めた。やがてバビロン滅亡後、彼らが再び自分の国を回復したのは、歴史で見るとおりである。

3月17日 今日の通読箇所 ハバクク書1：12～17

「強国滅亡」

ハバククにはイスラエルの罪も、また神がバビロンの軍隊を用い、暴虐な侵入を許し、イスラエルを裁かれることも分かる。しかし裁きの軍隊としてこの国に侵入したバビロンは、偶像礼拝と不道德と、かつ野蛮な侵略国であり、その悪はイスラエル以上なのだ。しかも彼らはさらに諸国を攻撃し、富を集め、豊かに贅沢に暮らしている。預言者はこれを理解しかねて、神様に説明を求める。これがこの章のテーマだ。(13節)「あなたは目が清く、悪を見られない者、また不義を見られない者であるのに、悪しき者が自分よりも正しい者を、のみ食らうのに、何ゆえ黙っていられるのですか」。神はこの質問に対して、次章で答えられる。それはバビロン滅亡の預言だ。

3月18日 今日の通読箇所 ハバクク書2：1～8

「見張所」

「見張所」「物見やぐら」は、市内を見張って、犯罪や事故に対応するため、また外部からの侵入者を見張るため、軍人、役人などが勤務している。心なしかそこは天にも近い。ハバククは実際に「見張所」には立たないが、祈りのうちにイスラエル、またはバビロンなどの実際の状況を観察し、神様にとりなしの祈りをした。その時、高い、天に近い「見張所」に立つ心地がしたのだろう。預言者はとりなしの祈りをするのと、神のみ言葉を取り次ぐのが使命だ。どうぞ私たちもハバククのように、祈りの「見張所」に立ちたい。ていねいな愛の観察で、すべての人の喜びと悩みを知り、その問題を知りたい。彼らの心の祈りを知りたい。そして、彼らのために神様にとりなしの祈りを捧げる奉仕に当たりたい。

3月19日 今日の通読箇所 ハバクク書3：1～11

「世界の審判」

小預言書の交読が進んでいるが、ここでは国々に及ぶ、また全世界に対する、神の裁きが記されている。愛の神様はここでは義の神として、雷鳴のごとく、将軍のごとく描かれている。また、神を侮ってきた全世界が、神の怒りの前に震えおののくさまが記してある。我々は、これらの預言が、終末の裁きを語っていることにすぐ気がつく。その文体、内容は「ヨハネの黙示録」によく似ている。旧約聖書の交読も終わりに近づいている。ちょうど新約聖書が、「黙示録」で終わるように、これから「旧約の黙示録」とも言うべき、終末の預言が現れてくるのだ。多分次第に難解になるかも知れません。まあ頑張って読みましょう。

3月20日 今日の通読箇所 ゼパニヤ書 1 : 1 ~ 13

「終末の審判」

ゼパニヤ書は、一口で言えば、終末の審判の預言だ。最初に選民イスラエルの審判が記されている。[4~6 節]を見れば、いかに彼らが手当たり次第に、さまざまな偶像礼拝にふけたかが分かる。祭司も王も権力者も罰を受ける。[11 節]「しっくいの家」はいわゆる億ション。「あきないをするもの」は実業家。「銀を計るもの」は銀行だ。いかにも「万事金の世の中」で、今の日本に似ていないこともない。[12 節]には、不信仰、不従順にこりかたまり、神の正しさを無視し、侮る者も裁かれる。しかし(マタイ 24 章 30,31 節)にあるように、クリスチャンがこの裁きに巻き込まれないよう「彼は御使いたちをつかわして、四方から選民(クリスチャン)を集める」のだ。

3月21日 今日の通読箇所 ゼパニヤ書 2 : 1 ~ 11

「正義を求めよ」

ゼパニヤは、[1~4 節]で、終末の審判を免れるように、今の間に、悔い改めることを勧める。[4 節以下]は、ペリシテ・カナン・モアブ・アンモンその他、同じように罪を犯しながら、イスラエルの弱みに付け込んで、侵略、略奪をほしのままにした、近隣諸国の裁きの預言である。彼は(2 章 3 節)で呼びかける。「すべて主の命令を行うこの地のへりくだる者よ、主を求めよ。正義を求めよ。謙遜を求めよ。そうすればあなたがたは主の怒りの日に、あるいは隠されることがあろう」と。これはさらに終末に近づいている、われわれに対する、神の愛と警告のメッセージでもあるのだ。最後の日にはキリストは審判の席に着き給う。「救いの門」は閉ざされる。もう泣いても叫んでも、間に合わないのだ。

3月22日 今日の通読箇所 ゼパニヤ書 3 : 1 ~ 13

「裁きと救い」

[8 節]「わたしの決意は諸国民をよせ集め、わが憤り、わが激しい怒りをことごとくその上に注ぐことであって、全地は、わたしの怒りの火に焼き滅ぼされるからである」。これは「黙示録」と共通する、恐るべき最後の審判の預言だ。しかしその後、悔い改めた人々の救いと清めの預言も語られている。[9,10 節]「その時わたしはもろもろの民に清きくちびるを与え、すべて彼らに主の名を呼ばせ、心をつにして主に仕えさせる。わたしを拝む者、わたしが散らした者の娘はエチオピアの川々の向こうから来て、わたしに供え物をささげる」と。「世界の裁きの日」は「世界の清めの日」であって、今の間違った世界構造は滅亡する。ゆえに救われた者には、待ち遠しい大きな祝福の時なのだ。

3月23日 今日の通読箇所 ハガイ書1：1～15

「神殿再建」

たびたびの不信と罪の結果、神の裁きを受けて滅亡したイスラエルは、70年間にわたってバビロンで捕虜生活に耐えていたが、ペルシャ王クロスの勅令によって、解放、帰国が許された。彼らは帰国するとすぐ、何よりも優先して、破壊された神殿の再建に着手した。「礼拝こそ我々の信仰の中心だ」と思ったからである。しかし状況は厳しい。彼らは家の建築、荒れた畑の耕作など、自分の生活の立て直しもしなければならなかった。一方、神殿再建もなかなか進展せず、失望感や疲労、倦怠に繋がった。その時預言者ハガイは「今あなたがたのなすべきことを考えるがよい」と、警告、奨励のメッセージを伝えたのだ。その結果、彼らは再び奮起して建築に励んだ。

3月24日 今日の通読箇所 ハガイ書2：1～9

「みすばらしい神殿」

さて長い犠牲と努力の結果出来上がった神殿は、貧しくみすばらしく見えた。昔の栄光輝く「ソロモンの神殿」を見た老人もまだ多く残っていて「この神殿は無にひとしい」というのはその実感だった。ハガイは無理をせずその現実を見据えた。そしてまた新たに主の言葉を語った。(2章4節)「すべての民よ、勇気を出せ。働け。わたしはあなたがたと共にいると、万軍の主は言われる」。今まで神殿がなかったことを思えば、神殿落成はどんなに感謝だろう。また、貧しい自分たちだが、とにかく最善を尽くし、神がこれを受け入れてくださったと思えば、これまた感謝と満足があるはずだ。かくて旧約聖書の歴史の中で、また新しい時代が開けて行くのである。

3月25日 今日の通読箇所 マラキ書1：6～10

「墮落祭司」

今度交読する予定だった「ゼカリヤ書」は、旧約の「黙示録」と言われ、象徴的な記述に溢れ、難解で交読しても意味が分からない。それで「マラキ書」に進みます。いま国民のために尽くすべき、厚生省、大蔵省、その他の役人が、義務を怠り、地位を利用して賄賂を取るのだから国民は困っている。しかし当時のイスラエルでは、国民を代表して神に仕える祭司たちが墮落して、形式だけの礼拝に陥っていた。もちろん、律法にかなわぬ食物や、傷物の動物を献げたというのは、象徴的表現だろう。しかし誠意のない、形式だけの礼拝や献げものは、神の厭い給うものだった。神は「せめて誰か、神殿の戸を閉じてくれないか」とおっしゃる始末だった。

3月26日 今日の通読箇所 マラキ書2：1～9

「教会の警戒」

いま墮落している祭司たちも、かつて祭司制度の初期には[4～9節]のように、その神聖な職務に忠実だった。彼らは「平安と公儀をもって主と共に歩んだ」、また「多くの人を不義から立ち返らせた」。しかし彼らはこの「万軍の主の使者」の奉仕から脱線したのだ。教会はいま1ヶ月に2回「教会史」を勉強しているが、中世紀の教会と聖職者の墮落は想像を絶する。これが宗教改革を呼び起こしたのだ。けれども人のことばかりは言えない。牧師も、役員、SS教師も、長い奉仕に慣れて、いつの間にか純真と熱意を失い、神にも人にも当てにされず、かえって忌み嫌われるような姿に落ちぶれない保障はない。教会は、いつも清新な力と希望に満ちて進みたいものだ。

3月27日 今日の通読箇所 マラキ書2：13～17

「裏切り」

「偶像礼拝」は「靈的姦淫」だと言われる。しかし、当時の祭司たちは、神の前に誓って結婚した妻に対する裏切り行為があったようだ。なぜそんなことが起こったのか。その理由は[17節]「それはあなたがたが『すべて悪を行う者は主の目に良く見え、かつ彼に喜ばれる』と言い、また『さばきを行う神はどこにあるか』と言うからである」。これはすべての罪を犯す者の内心にある、神を侮辱しその裁きを無視する、ひとつの覚悟、逆信仰告白とも言うべきものだ。詩篇に「愚かな者は心のうちに『神はない』と言う。彼らは腐れはて、憎むべき事をなし、善を行う者はない」。と言ってあるとおりだ。お互いに心しよう。

3月28日 今日の通読箇所 マラキ書3：1～7

「キリストの来臨」

ここには、キリストの来臨の預言がある。旧約時代の預言者は、遠い山脈を見るように未来を見た。近づいてみると、一緒に見えていた手前の山と、その向こうの山との間に、かなりの谷があるのが分かる。キリストの来臨も同じで、最初は人の罪を贖うために、謙虚な姿にお生まれになった。しかしキリストは再び来たり給う。つまり再臨だ。その時、神とキリストに逆らう、あらゆる者に対する審判が行われるのだ。また現在イスラエルは、亡国、離散など、厳しく裁かれている。しかし永遠の目で見れば彼らは、究極的に見捨てられることはない。彼らは悔い改め、主に用いられるのだ。

3月29日 今日の通読箇所 マラキ書3：8～12

「神のものを盗む」

預言者はイスラエルの罪の一つに「神のものを盗んだ罪」を挙げる。しかし彼らは(3章8～10節)「『どうしてわれわれは、あなたの物を盗んでいるのか』と言う。神はなお言い給う。「あなたがたは十分の一と、ささげ物をもって(盗んだ)のである。わたしの宮に食物(必要なもの)のあるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさい」と。献金を怠ることは、当然神に帰すべきものを私するのだから、神の厳しい目で見れば、神のものを盗むに等しいのだ。人間が正しい献げものをもって神に仕えれば、神もまた報い給うと、主はくり返し言い給う。

3月30日 今日の通読箇所 マラキ書3：13～17

「二種類の人」

ここには二種類の人が挙げてある。最初は「あなたがたは言った、『神に仕える事はつまらない。われわれがその命令を守り、主の前に歩いたからといって、なんの益があるか。今われわれは高ぶる者を祝福された者と思う。悪を行う者は栄えるばかりでなく罰せられない』」。と言う不信仰者。次は信仰者。教会の祝福の一つが、クリスチャン同志の交わりにあることは、みな経験している。そして会話も楽しい。しかし主はこの会話に耳を傾けてくださる。つまりクリスチャンの会話は、会話の形の祈りなのだ。神はメモをとり、この会話の祈りにも答えてくださる。すばらしいことだ。

3月31日 今日の通読箇所 マラキ書4：1～6

「義の太陽」

最後の審判の日には、罪人を裁くために大きな炉が築かれる。有力者、富者はその中でわらのように、枝のように燃え、痕跡も残さないだろう。一方、神に従う民には勝利と解放がおとずれ、その喜びの様は、牛舎から出された子牛が跳ね踊るようだ。[4章5節]「見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす」とは、救い主に先立って遣わされる、バプテスマのヨハネの預言である。[4章6節]「彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる」。つまり、キリストの紹介のために、また救われる人のために、準備する役目を帯びて、神から派遣されるのだ。